



👁️👁️ みどころ

原作は、本多孝好の『真夜中の五分前 five minutes to tomorrow (side-A・side-B)』。行定勲監督は、なぜその舞台を上海に？そして、美しい一卵性双生児の姉妹役を中国「新世代四大女優」の1人、劉詩詩に？そんなアジア映画プロジェクトの新しいスタンダードに注目！

ワケのわからないタイトルだが、その意味シンさが本作のポイント！双子姉妹の入れ替わりミステリーも興味深いが、「5分遅れた世界」とは一体ナニ？それは、どうやったら戻すことができるの？そんな哲学的な行定監督の問いかけ（？）に、アジア全体で立ち向かいたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■なぜ舞台を上海に？なぜ日中合作に？■□■

本作が日本で公開されたのは私が観た2014年12月27日だが、本作をアジアで最初に公開したのは中国で10月23日が初日。続いて11月21日に台湾で封切られ、11月23日の第15回東京フィルメックス映画祭にてジャパンプレミアが行われた後、12月27日に日本で公開された。本作のワールドプレミアは2014年10月3日、第19回釜山国際映画祭だ。

パンフレットにある4頁にわたる長文の「Production note」を読めば、本多孝好の原作『真夜中の五分前 five minutes to tomorrow (side-A・side-B)』をもとに、プロジェクトが動き始めたのは2011年頃。「Production note」のラストには「アジア各国での公開を視野に入れた

プロジェクトとして始動してから約4年。本作の成功を受けて、このように国境を越えて制作していく映画作りが、アジア映画プロジェクトの新たなスタンダードとなるかもしれない」と書かれている。こんなプロジェクトが可能になったのは、ひとえに行定勲監督の才能をアジアが認めたからだ。

■□■行定監督の狙いは？日経新聞の分析は？■□■

行定監督は『GO』（01年）（『シネマルーム1』91頁参照）で第5回釜山国際映画祭国際批評家連盟賞を受賞して一躍有名になり、その後も『世界の中心で、愛をさけぶ』（04年）（『シネマルーム4』122頁参照）、『春の雪』（05年）（『シネマルーム9』356頁参照）、『パレード』（10年）等のヒット作を続けているが、パンフレットにある行定勲監督のインタビューによれば、原作の「五分前」の意味をトコトン突き詰めて考えていく中で「急にアジアだ」と考えたらしい。つまり、本作の主人公・良（リョウ）（三浦春馬）を、時計修理工として上海で1人で働いている日本人青年という設定にすることによって、『なんで中国にひとりであるんだろう？』という想像が（観る側に）働き、説明がいらなくなりそうです」というわけだ。

しかして、2014年12月25日付日本経済新聞「文化往来」は、その点について次のように解説している。すなわち、①アイデンティティーの揺らぎという主題にひかれた行定は10年前前から意欲を燃やしていたが、「日本では時流に逆らった企画で資金のメドがたたなかった。そこでアジア映画に作りかえようと考えた」。②釜山映画祭の企画マーケットで話題となり、上海のプロデューサーが共同制作に名乗りをあげた。③「国内の観客に適合したものを追う日本の映画界より、アジア市場の方が企画の受け皿が大きい。僕らにすれば自由に作れる」と行定。④尖閣諸島問題などで高まった反日ムードも乗り越え、完成させた。⑤10月に中国で約4000スクリーンというハリウッド大作に準じる規模で公開。⑥台湾、シンガポールを経て、27日に日本で公開する。

クソ面白くない原作モノの邦画が氾濫している昨今、行定監督のこんな構想と実行力にまず拍手を送りたい。

■□■中国新四大女優の劉詩詩に注目！■□■

中国の「四大女優（四大名旦）」といえば趙薇（ヴィッキー・チャオ）、章子怡（チャン・ツイイー）、徐静蕾（シュー・ジンレイ）、周迅（ジョウ・シュン）の4人だが、范冰冰（ファン・ビンビン）をはじめとする新しい中国の美人女優が次々と生まれている今、中国の「新世代四大女優（四小花旦）」の1人と呼ばれているのが1987年生まれの劉詩詩（リウ・シーシー）と劉亦菲（リウ・イーフェイ）、楊冪（ヤン・ミー）、唐嫣（タン・イェン）の3人。私は劉詩詩を本作ではじめて見たが、日本の女優・石田ゆり子とよく似た正統派の楚々とした美女だ。

『複製された男』(13年)、『シネマルーム33』(275頁参照)と『嗤う分身』(13年)、『シネマルーム35』参照)では、この世の中に思いもかけない自分のソックリさんが登場してきたことによる大騒動(?)が描かれた。また、韓国映画『怪しい彼女』(14年)では、「50歳若くしてあげますよ」と店主がおべんちゃら(?)を言う青春写真館で写真を撮ってもらおうと、ホントに70歳のおばあさんが10代に戻ってしまうという形で、韓国女優シム・ウンギョンがコミカルに「二人一役」を演じていた(『シネマルーム33』282頁参照)。さらに、インド映画の『チェイス!』(13年)、『シネマルーム35』参照)では、性格も役割も正反対で、「表と裏」の関係にある双子の兄弟の愛と確執が、壮大なドラマの中で描かれた。

しかして、本作で劉詩詩が演じるのは姉のルオランと妹のルーメイという一卵性双生児の姉妹だが、清楚で質素な姉ルオラン、妖艶で奔放な妹ルーメイという違いを劉詩詩はどのように演じ分けるのだろうか?それに注目!



■□■プールでの出会いは? 「送鐘送終」とは? ■□■

私は上海に何度も行ったことがあるから、本作に登場する「Location Map」は興味深い。ただ、本作のストーリー展開上の主要なスポットとして登場するのは、源深体育中心のプールだ。老店主が経営する時計店の2階に住み込んで時計修理工の仕事をしている良の唯一の気晴らしは、この公営プールで泳ぐことらしい。ひと泳ぎした良が偶然

見つけたのが、美しい水着姿の女性ルオランだ。そんな彼女から「このあと時間ありますか？」と話しかけられたのは超ラッキーだったが、その依頼は「ある人へのプレゼントを良に選んでもらうこと」だった。普通はそんなことを言われても困るものだが、ルオランのような美女から頼まれたら・・・。

私はそもそも女性の買い物に付き合うこと自体が苦手だから、プレゼントがなかなか決まらず困っている良の気持がよくわかる。したがって、最後に自分の勤めている店に連れて行ってアンティークの時計を「贈り物」として提案したのは、それがベストの選択と考えたのではなく、きっと窮余の一策だったはずだ。その置き時計は15分おきに音を鳴らすものだったが、中国では「送鐘送終」（つまり、時計を送ることは終わりを送ること）だから、一般的に時計を贈り物にするのはダメとされているらしい。私は2011年12月9日に中国語検定三級に合格し、現在も中国語の勉強をしているから、本作で良がしゃべる程度の中国語はほとんど理解できる。私と同じように良が中国での「送鐘送終」を知らなかったのは当然だが、そんな中国の慣習をよく知っていながら、ルオランはなぜルーメイの婚約祝いに良が選んだ置き時計を贈り物にしたのだろうか？

■なぜ時計を5分遅らせているの？5分遅れた世界とは？■

旧日本海軍が礼節を重んじたことはよく知られているが、その伝統の1つとして「5分前精神」があった。これは、「定刻の5分前には準備を終えておき、定刻と同時に作業を始められる状態にしようとする精神のこと」だ。そのことは、私が中学時代に読んだ獅子文六の小説『海軍』（42年）にも書かれている。それに対して、良が自分の時計を5分遅らせているのは、かつての恋人を失った悲しみから、自分は「5分遅れた世界」を生きているためらしい。ルオランが良からそんなことを聞かされたのは2人がかなり親しくなってきたからだが、実はルオランもモデルとして大成功を収め婚約者である映画プロデューサーのティエンレン（張孝全（チャン・シャオチュアン））との毎日を楽しく過ごしている妹のルーメイに対して激しい嫉妬心を燃やしていたようだ。

贈答品として置き時計を選んだ翌日、お礼としてルオランがセットしてくれたレストランでは、いつの間にかルオランがルーメイに交代していることに良は全く気付かず、ただ驚かされただけ。しかし、その後のゴルフやティエンレンの別荘での語り等々を経る中で、顔はそっくりだが、実は内面においてルオランとルーメイは全然違っており、自分が愛する姉のルオランは自分と同じように「5分遅れた世界」に生きていると知った良がルオランへの思いを深めていったのは当然だった。この「5分遅れた世界」が本多孝好の原作のテーマであり、トコトンを突き詰めていくことが行定監督の本作演出の動機になっているため、パンフレットも参考にしながら、一人一人がその意味をしっかり噛みしめたい。

■□■死んだのはどっち？■□■

『複製された男』は『ENEMY』という原題からわかるとおり、意味シんでミステリー一色いっぱい映画だった。それに対して本作は、行定監督がインタビューで答えているとおり、「5分遅れた世界」が「5分戻されること」がテーマであり、そこだけを映画化したいと思ったそうだから、決して本作にミステリー性を求めたものではない。

しかし、モーリシャス旅行に出かけたところで、偶然起きた事故によって姉妹の1人が死亡してしまったことによって、死んだのはどっち？というミステリアスなテーマが浮上してくることになる。死体はどっち？そして、今ベッド上に昏睡状態で眠っているのはどっち？それは、目を覚ました女性が良ではなくティエンルンの手を握りしめたことから、妹のルーメイであり、死亡したのが姉のルオランであることは明らかだが、さてその後の展開は・・・？

■□■それも問題だが、問題の本質は・・・？■□■

『複製された男』では、2人の「そっくりさん」は胸の傷まで同じだったが、インド映画の『チェイス！』では、「お前が犯人だという証拠はこの銃弾のあとだ」とシャツをめくったにもかかわらず、そのそっくりさんには銃弾の傷がなかったのが前半のハイライトだった。しかして、本作では、小さい頃の2人がブランコ遊びをしていた時、ルオランがブランコを強く押し続けたため、ルーメイが地上に落ち、その時に受けた頭部の傷が今も残っているらしい。したがって、今生き残っているのが、ルーメイではなく姉のルオランだとティエンルンが疑うのなら、その傷を確認すればいいだけだが、実は話はそれほど単純ではないようだ。

また、ティエンルンは今、俺の目の前にいる妻はルオランが入れ替わっているのではないかと疑っていたが、同じように良もそれを疑っているの？いやいや、ホントの問題はそんなことではなく、ティエンルンにとっても良にとっても、自分が真に愛した女はどっち？それがホントの問題なのでは・・・？

■□■なぜモーリシャスの教会へ？■□■

あなたはモーリシャスがどこにあるか知ってる？モーリシャスは、アフリカ大陸の東に位置する島だが、海洋への進出が著しい今の中国人は知っていても、多くの日本人はそんな島を知らないはずだ。ルオランとルーメイがなぜ2人だけでその観光に出かけたのかは全く語れないが、1756年に首都ポートルイス近郊に建てられた、モーリシャス最初のローマン・カソリック教会の美しさは、本作を観ればよくわかる。モーリシャス共和国では一部スタッフだけが約1か月強の作業を行ったそうだが、その費用はHOW MUCH？

それはともかく、モーリシャスではルオランとルーメイの2人が訪れる教会と、そこで交換される十字架と腕時計がポイントになる。教会の中では大きなマリア像が見守っていたから、あまりインチキなことにはできないはずだが、仲良く肩を組んで並んでいるルオランとルーメイの2人の心の中にはどんな葛藤が・・・？

■□■この不可解な行動を、どう読み解く？■□■

一卵性双生児の場合は志向性もよく似ているため、2人が偶然に全く同じ洋服や靴を買ってくることもあるらしい。他方、本作冒頭には、一方が窓ガラスに石を投げて割った後、ドレスを着替えることによって他方を犯人に仕立てあげるといった恐ろしいシーンが登場するから、一見仲の良さそうなこの一卵性双生児の姉妹は幼少の頃から抗争状態にあったの？そんな疑いさえ生じてくるほどだ。すると、ブランコで押したのはどっち？そして、頭に傷を受けたのはどっち？ひょっとして、互いにそれすらわからなくなっているの？

モーリシャスの教会での2人の（ルオランの？）何とも不可解な行動をどう読み解くのかは難しいが、さてあなたの見解は？そして、ラストシーンにみる、良とルオラン（ルーメイ？）との再会のシーンをあなたはどう読み解く？



2015（平成27）年1月6日記